

# 奈良・平安時代における竪穴建物廃棄の祭祀

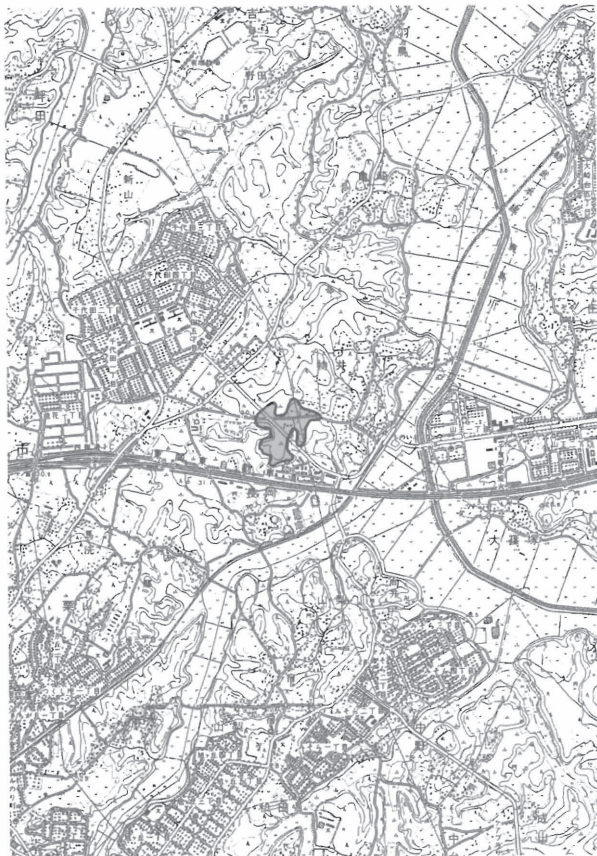
—千葉県四街道市小屋ノ内遺跡出土土器群を中心として—

糸川道行

## 1 はじめに

本稿の目的は、遺物の出土状況から奈良・平安時代の房総における竪穴建物廃棄の祭祀がどのようなものであるかを探ることにある。検討対象の主体は、千葉県四街道市に所在する小屋ノ内遺跡の様相である（第1図）。小屋ノ内遺跡は印旛沼に北流する鹿島川から延びる支谷によって区画された台地上に立地する。現在までに確認された竪穴建物は283棟、掘立柱建物は142棟と多数であり、奈良・平安時代にあつては下総国千葉郡物部郷の中心集落と目される遺跡である。〔糸川他2006・2007〕。

竪穴建物の祭祀といっても、残らない物質や精神文化だけのものを考慮すると、本稿で論じることがらは



第1図 小屋ノ内遺跡の位置 (1/50,000)

その一部に過ぎない<sup>1)</sup>。また発掘調査からわかることは、主として廃棄の様相であり、竪穴建物の建築時及び日常の祭祀を復元することはかなり難しい<sup>2)</sup>。廃棄時にうかがえる様相が日常的に行われた可能性も考えられるが、確認しがたいため、本稿では「廃棄の祭祀」として論を進める。

奈良・平安時代の東国集落における遺物のうち、祭祀性をもつ一般的なものをあげると、およそ以下のようなものがあげられる。まず墨書土器など文字・記号をもつもの、次に灯明器、さらに打ち割り・打ち欠き及び穿孔されたものがある。それらの中には、小型の灯明器など祭祀専用のものも少数みられるが、多くは土師器杯・須恵器杯などの日常的な土器に手を加えたものである。その他に手捏土器が古墳時代から引き続いて平安時代初頭頃まで若干量みられる。さらに遺物だけではとりたてて特徴のないものでも、出土状況に祭祀性をうかがえるものがある。したがって通常では祭祀的ではないすべての遺物が時と場合に応じて祭祀的なものとなる可能性がある。逆に墨書土器・灯明器のすべてが祭祀的な遺物であるかどうかについては、本稿では問わないこととする。また打ち割られた土器や穿孔された土器のなかには、硯や紡錘車など明らかに実的な要素の濃いものがある。そのため本稿で対象とするのは、出土状況に祭祀的な性格をもつ可能性のある遺物に限定する。

さらに斎串や木製・土製の人形・馬形など、祭祀専用の遺物がある。これらは奈良・平安時代の祭祀における重要な遺物であるが、台地上の集落から出土することが少ないため、本稿では検討対象としない。

さて祭祀の定義について論じれば、それだけでも多大な検討が必要と思われるが、ここでは特定性がある行為<sup>3)</sup>とその行為にいたる精神活動としておきたい。ただし特定性がある行為といっても、数が少ないと考えているわけではない。後述する竪穴建物・カマド廃

棄時の祭祀はかなり普遍的な可能性があり、また祭祀のなかには年中行事的なものも含まれると考えるため、その頻度はそれほど少なくないと想定する。年中行事的な行為については、たとえば「歳神」という墨書<sup>4)</sup>に現れていると考える。

## 2 打ち欠き・打ち割り及び穿孔された土器について

前項で祭祀性をもつ一般的な遺物のひとつとして、打ち割り・打ち欠き及び穿孔された土器を指摘した。これらの土器について、筆者は以前、千葉県印西市に所在する船尾白幡遺跡や鳴神山遺跡で、その様相を述べたことがあり〔糸川2004・糸川2005、以後上記二つの文献を前稿とする〕、近年では、小笠原永隆氏や岸本雅人氏により、千葉県印西市松崎遺跡群や八千代市間見穴遺跡出土土器群等の様相が検討されている〔小笠原2004・岸本2006〕。このような土器について、筆者は祭祀の様相を主体に述べたのであるが、先述したように硯や紡錘車などへの転用品として実用的性格の濃いものもある。またその他にも実用的な性格をもつ場合があるかもしれない。この点は今後の検討課題である。

ところでこれらの土器の最大の問題点は、破損部分が意図的なものであるか、そうでないかの認定が難しいことである。たとえ破損部分が整然としたものであっても、自然破損の可能性も考えられ、乱雑なものは

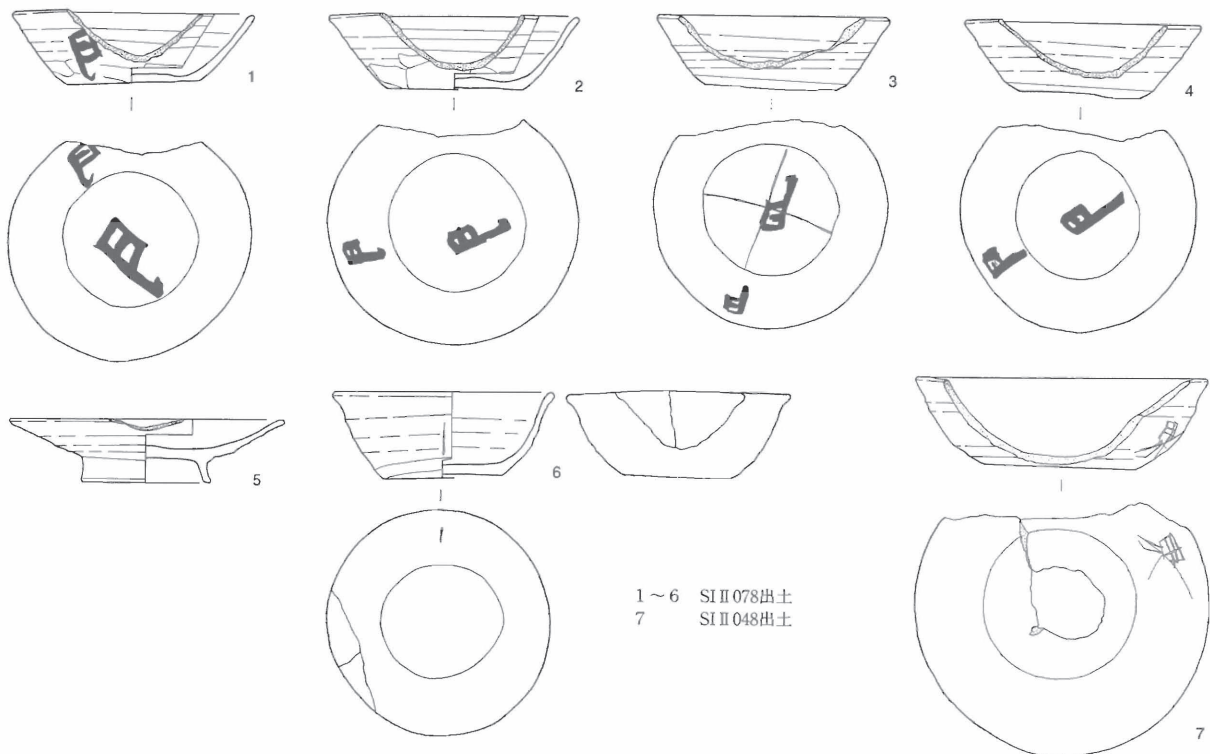
より区別が難しい。また整然と乱雑という区別自体が、観察者によって恣意的になることを否定できない。

しかし意図的に破損された土器は確実に存在する。そこで筆者が実見したなかで、代表的な土器を取り上げる。そのひとつは、印西市船尾白幡遺跡SI II 78号竪穴建物から出土した土器群である〔香取2005〕。この竪穴からは、欠損部が整然とした弧状の土師器杯・皿が合わせて5個体出土している(第2図1~5)。

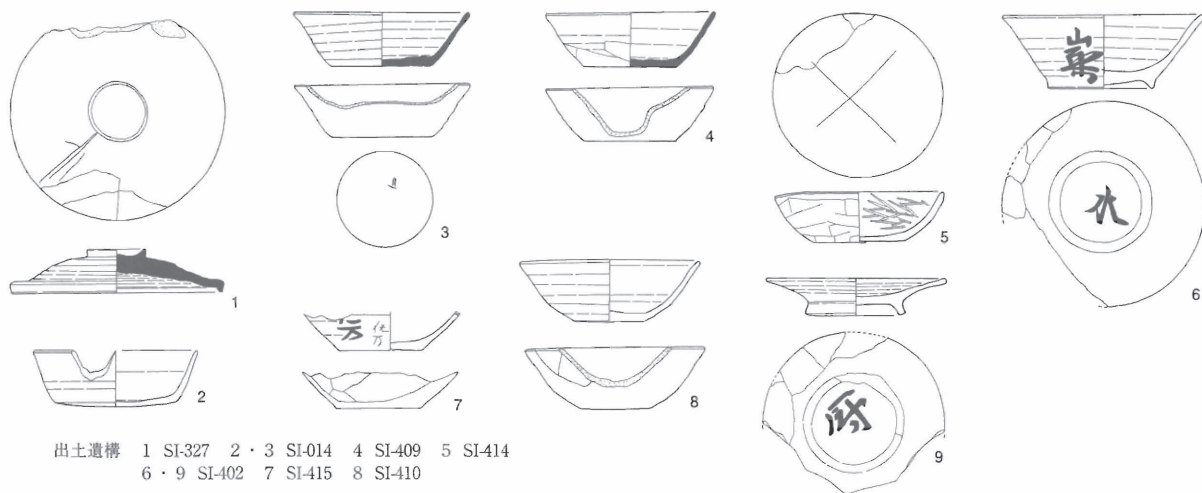
このうち、4点の杯は、底部及び体部に「門」という文字の左半分に似た墨書がみられる。複数個体の土器の欠損部形態と墨書に共通性があることを偶然の所産と考えるのは不自然であり、意図的な様相を認めてよいと考える。

同じ船尾白幡遺跡のSI II 48号竪穴建物から出土した土師器杯の一つは、口縁・体部の欠損に加えて、底部に孔をもつ(第2図7)。口縁・体部の欠損部は底部端までおよぶ大きな弧状を呈し、底部の孔は焼成後の穿孔である。さらに口縁・体部の欠損部脇には「鬼」とみられる線刻がある。出土状況を見ると、竪穴建物の出入り口部柱穴の上部で、堆積土下層に位置している。以上の状況から、底部の穿孔はいうまでもなく、口縁・体部の欠損部も意図的に破壊されたものといえよう。線刻と出土状況を加味すれば、竪穴建物廃棄の祭祀に使用された土器と考えられる。

穿孔部分を除く該当する土器の欠損部について、筆



第2図 船尾白幡遺跡出土土器 (S=1/4)



出土遺構 1 SI-327 2・3 SI-014 4 SI-409 5 SI-414  
6・9 SI-402 7 SI-415 8 SI-410

第3図 小屋ノ内遺跡出土打ち欠き・打ち割り土器 (S=1/6)

者は主として「打ち欠き」という表現をしてきたが、船尾白幡遺跡SI II 78号竪穴建物から出土した土師器杯には、破壊されたと思われる部分が接合しているものがある(第2図6)。打ち欠き土器のなかには、破壊された小片がカマド、主要部分が別の場所から出土する場合、またはその逆の場合などがあることから、両者を分離する意味がある場合もうかがえる。しかし接合するものは、欠失させるよりも割ることに、より意義があったものといえる。その意味では、このような土器については「打ち欠き」よりも「打ち割り」とした方が適切であろう。言葉の問題はともかく、ここで注意しなければならないのは、欠失してなくても意図的に破損されたものが含まれる場合があるという点である。たとえ完形のものでも、まったく割れていないものと、接合して完形のものとは、区別しなければならない場合がある。

打ち割り・打ち欠きされた遺物は、日本の広い地域に存在すると考えており、本稿で主対象とする小屋ノ内遺跡にもみられるものである。第4図～第6図は、後述する小屋ノ内遺跡における奈良・平安時代竪穴建物の遺物出土状況及びその出土土器の図面を示したものであるが、このなかに該種の土器が比較的多く含まれている。またその他に、打ち欠き・打ち割りの状態が良好である土器を第3図に示した。

### 3 出土状況からみた小屋ノ内遺跡竪穴建物出土遺物の祭祀性

#### (1) 事例

第4図～第6図は、小屋ノ内遺跡における全竪穴建物283棟のうち、遺物出土状況に祭祀性をうかがえる良好な事例を抽出したものである。図はおおむね各時

期順に添ったものであり、以下古い時期から竪穴建物ごとにみていく。なお小屋ノ内遺跡の出土遺物・遺構の時期については、I期・II期・III期に3大別しており、さらにI期・III期については、各々2期、4期の小期区分をしている〔糸川他2007〕。暦年代については、小屋ノ内遺跡単独では根拠資料がなく、以下の記述は、これまでの奈良・平安時代の土器研究の成果を基に、筆者が想定するものである。

I期 8世紀第2四半期～第3四半期前半

I - 1期はその前半、I - 2期はその後半

II期 8世紀第3四半期後半～9世紀初頭

III - 1期 9世紀第1四半期後半～第2四半期前半

III - 2期 9世紀第2四半期後半～第3四半期

III - 3期 9世紀第4四半期

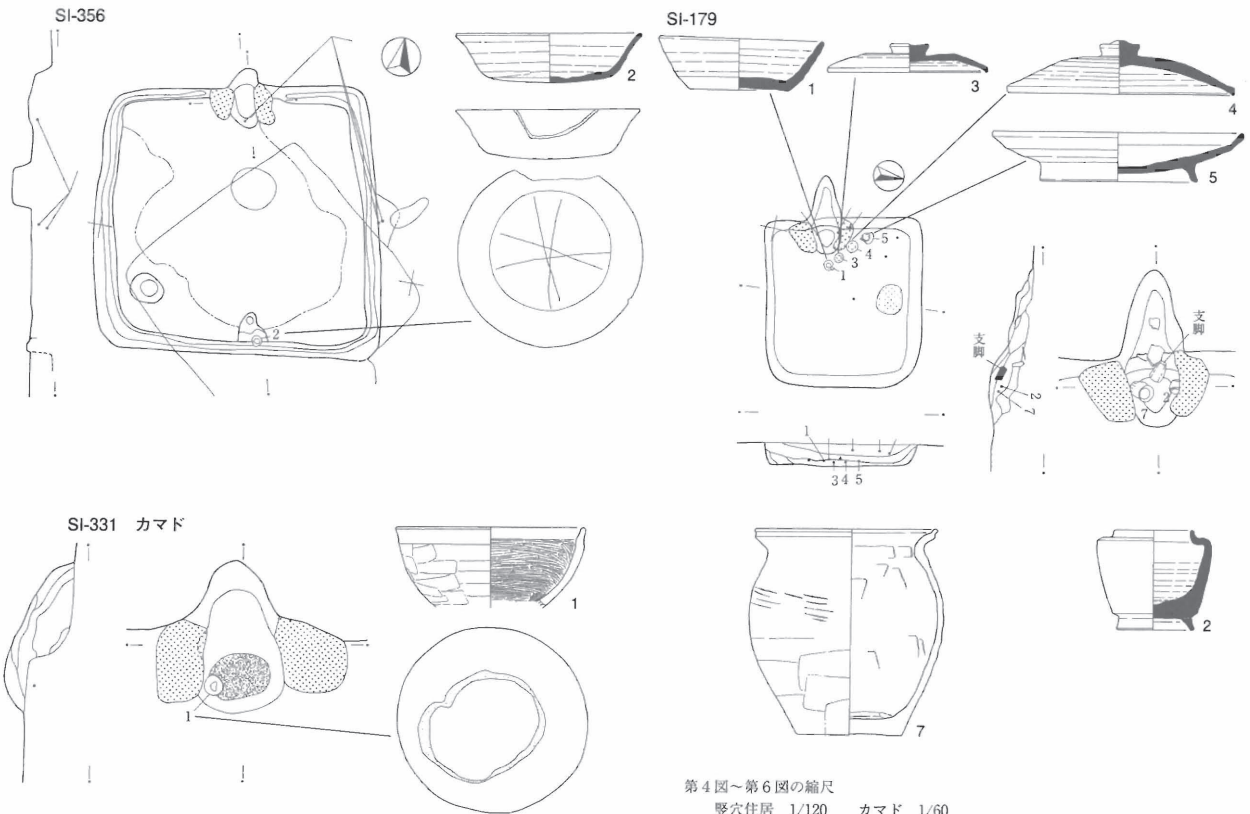
III - 4期 10世紀

以上のうち、特にIII - 3期とIII - 4期の年代観については不安定である。またその他の時期についても、今後の土器編年研究の進展に伴い、多少の動きがあると思われる。

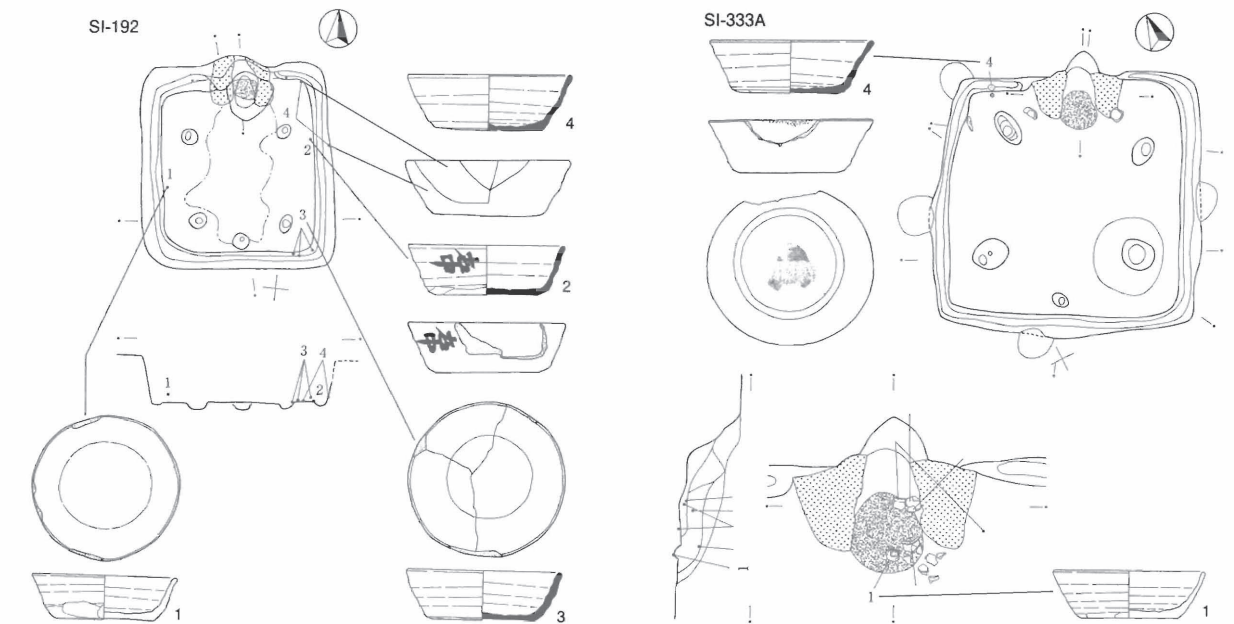
#### ①SI - 356 (第4図)

I - 1期の竪穴建物である。須恵器杯2(報告番号。以下同じ)が南壁<sup>5)</sup>際出入り口部の柱穴と壁溝の間の床面・壁溝上から正位で出土した。口縁・体部の一部を弧状に欠損しているが、他は割れずに遺存する土器である。底部外面には線刻があり、4条線が交差しているが、形状から星形(五芒星)を意識したものと思われる。新治窯産の須恵器杯であり、色調は口縁・体部外面が黒色、他はやや黄色味を帯びた灰色である。土器の様相及び出土状況から、欠損部は打ち欠きされたものとみられる。

#### ②SI - 179 (第4図)



第4図～第6図の縮尺  
 竪穴住居 1/120 カマド 1/60  
 土器 1/6または1/8 (1/8のみ遺物脇に表示)



第4図 小屋ノ内遺跡竪穴建物遺物出土状況(1)

I - 2期の竪穴建物である。4点の須恵器が、カマド前中央から右袖外脇壁際にかけて直線状に並んだ状態で出土した。出土層位はいずれも堆積土下層の3層上面である。中央からみていくと、1は杯で、倒位で出土した。油煙が付着しており、灯明器である。また口縁・体部の欠損部は打ち欠きされたものと思われる。3・4は蓋で、ともにつまみを下にした倒位の状態で出土した。3は小振り、4はやや大振りの土器で、と

もに完形品である。5は高台付盤で、これも倒位の出土である。カマド内では、土製支脚が火床部奥側中央から横に倒れた状態で出土した。出土位置から、使用時の位置で倒れたものと思われる。また須恵器の小型短頸壺2がカマド内右袖脇から横向きで出土し、小型の土師器甕7が左袖脇からかなり傾いた正位で出土した。本竪穴はカマド右脇の床面が左脇よりも広く、カマド右側が土器等の日常的な保管場所であることも考

えられる。しかし直線的に並ぶ状況と、カマド内の遺物出土状況から、以上の土器群はカマド廃棄の祭祀に関わるものと考えられる。直線的な4点の須恵器のうち、蓋3・4については伏せた状態とみるにはやや違和感がある。正位の杯と同様に使われたのかもしれないが、判然としない。なお堆積土3層以下はロームの含有が多く、埋め戻されていると思われる。

③SI - 331 (第4図)

I - 2期の竪穴建物である。非ロクロの土師器杯1がカマド内左袖寄り下層から正位で出土した。底部には大きな孔がみられ、他は割れずに遺存する土器である。孔は焼成後の穿孔である。

④SI - 192 (第4図)

II期の竪穴建物である。4点の杯が壁際の床面・下層から出土している。1はほぼ完形のロクロ土師器杯で、西壁際中央やや南寄りの下層から正位で出土した。2～4は須恵器杯である。2は東壁際北寄りの床面から正位で出土した。体部外面に横位で「右中」と書かれた墨書があり、墨書に向かって右側に、口縁・体部の欠損部がある。欠損部はその形態及び墨書との関係から打ち欠きされたものとする。墨書に破損がおよんでいないので、打ち欠きが先、墨書が後であろう。3は灯明器である。南東隅の床面から出土し、3片からなるほぼ完形の土器である。主要部は斜めに傾いた正位で出土した。土器の様相及び出土状況から、意図的な破損と思われる。4も接合の結果完形となった土器で、破損部はその形状から打ち割りされたものとみられる。主要部は2に近い東壁直下の床面同等レベルから、斜めに傾いた正位で出土し、破損部分は北東隅の床面から出土している。

⑤SI - 333A (第4図)

II期の竪穴建物である。完形のロクロ土師器杯1が、カマド火床部底面の前側から正位で出土した。また須恵器杯4が西(左奥)隅に近い壁溝上でカマドの左外側から出土した。口縁・体部の一部が欠損するが、他は割れずに遺存する土器で、底部外面には朱墨と思われる赤色物質が付着している。また接して出土した環状の鉄製品15の錆が付着している。欠損部は打ち欠きされたものとみられる。土器の様相・出土位置から祭祀的な土器と思われるが、正位・倒位等の状況は不明である。15が祭祀的であるかどうかについては、可能性があると考えるが、断定しがたい。

⑥SI - 384 (第5図)

II期の竪穴建物である。カマド中央から遺存のよい

土師器甕5が、口縁部を焚き口側に向けた状態で出土した。土器の上部が確認面にかかるため、本来は完形に近い土器かもしれない。この甕の中から、須恵器杯3が、甕と同様に口縁部を焚き口側に向けたやや上向きの横位の状態で出土した。割れていない完形の土器である。カマド左袖前方の床面からは、ロクロ土師器杯1が正位で出土した。また出入り口部の柱穴近くの壁際下層からは、須恵器杯2がやや斜めに傾いた正位で出土した。1・2の口縁・体部には欠損部があり、その形状からともに打ち欠きされたものとみられる。

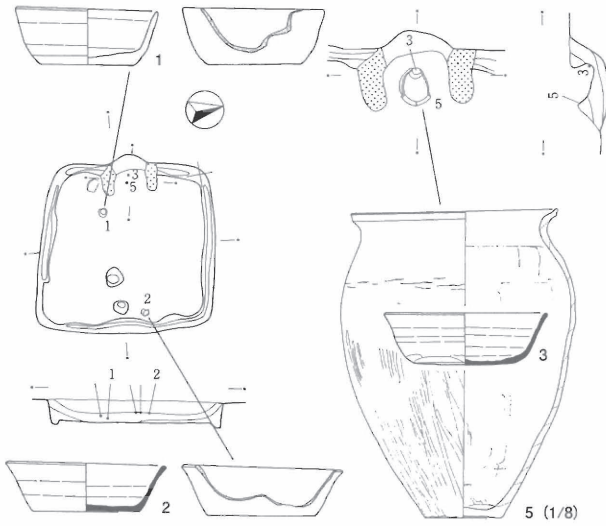
⑦SI - 104 (第5図)

II期の竪穴建物である。カマド右袖外脇の床面から遺存のよい遺物が集中して出土した。内訳は、非ロクロの土師器杯1点(1)、土師器甕5点(4・5・6・7・9)、須恵器蓋1点(2)、土製支脚2点である。土師器甕4・9は胴部下部以下を欠損する土器で、破断面が水平であることから、欠損部は意図的に破壊されたものと思われる。4の上から5が正位で出土し、9の上から7がやや下向きの横位で出土した。2はカマド右袖脇で遺物群の最も左側から倒位で出土した。1は遺物群の最も右側から正位で出土した。土製支脚は壁際の出土である。6は甕の底部周辺の破片であるが、2の脇から正位で出土した。

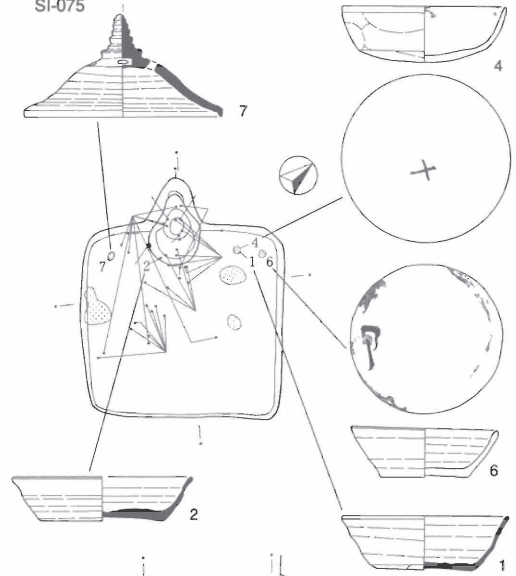
⑧SI - 075 (第5図)

III - 1期の竪穴建物である。カマド内及びカマドのある北西壁側の下層・床面から遺存のよい土器が7点出土した。土器と出土位置を左から右にみていく。まず左奥隅近くの下層から須恵器香炉蓋7が倒位で出土し、カマド前やや左側下層からは須恵器杯2が正位で出土した。次にカマド内火床部ほぼ中央からは、須恵器杯3・5が正位の2枚重ねで出土した。3が下、5が上である。そしてカマドと右奥の中間床面からは、非ロクロの土師器杯4・須恵器杯1が3・5同様正位の2枚重ねの状態に出土した。1が下、4が上である。最後に右奥隅の床面から、ロクロ土師器杯6が正位で出土した。3・5・7は割れていない完形品である。6もほぼ完形であるが、口縁端部にわずかな欠損がある。4も完形に近いが接合した土器である。1は口縁・体部の一部、2は多くを欠損している。1の欠損部断面は「U」字状、2の破断面は連続した細かい弧状であり、ともに打ち欠きとみられる。4・6は灯明器である。また4は底部外面に「十」または「+ (×)」の墨書があり、6も体部内面に横位で「与」の墨書がある。以上の土器群は、カマド内の3・5がやや奥に

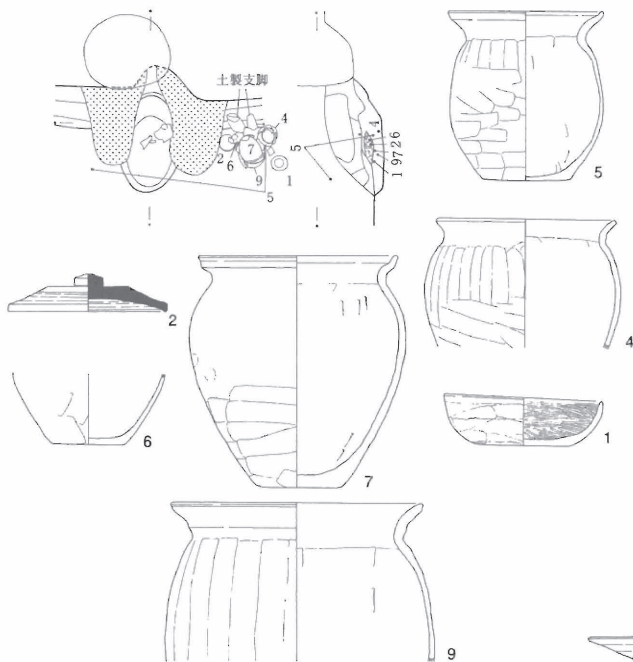
SI-384



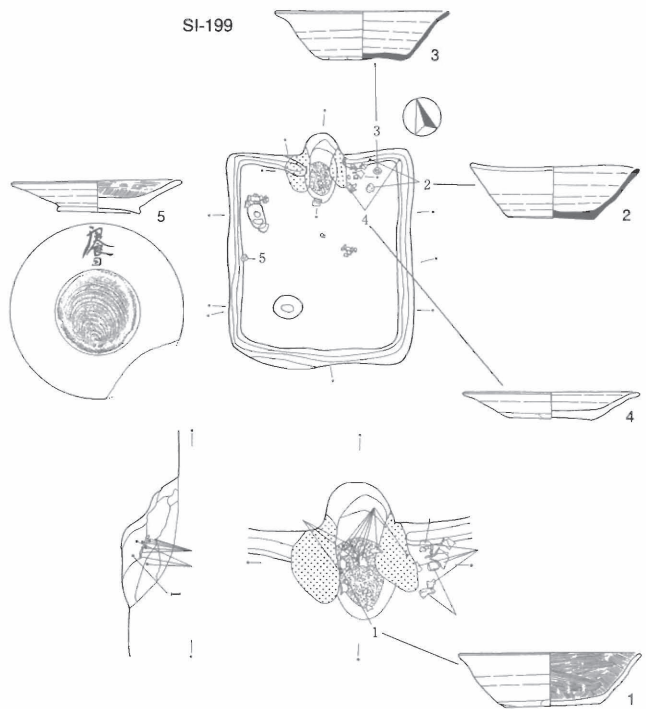
SI-075



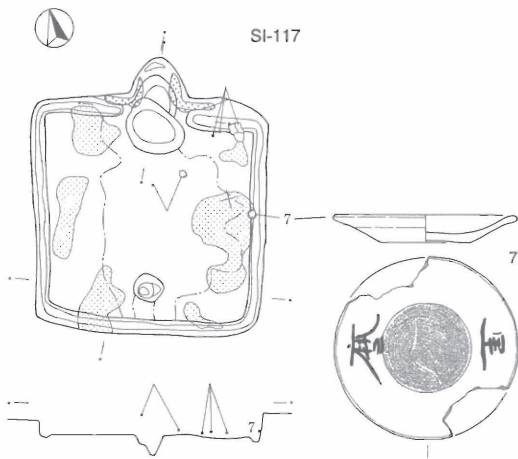
SI-104 カマド



SI-199



SI-117



第5図 小屋ノ内遺跡竪穴建物遺物出土状況 (2)

寄っているが、その他の土器群は北西壁からの距離もほぼ一定で、またかなり規則的な間隔で出土している。遺物の様相からも、意図して置かれたことが確実と考える。

⑨SI - 117 (第5図)

Ⅲ - 2期の竪穴建物である。ロクロ土師器皿7が東壁際中央の下層から正位で出土した。この土器は体部外面の対向する位置に「麻呂」・「里」の墨書が正位で書かれている。また各々の墨書の近くには口縁・体部の欠損箇所があるが、こちらもほぼ対向する位置関係であり、打ち欠きとみられる。なおこの土器の場合、墨書に破損が及んでいないため、打ち欠きが先、墨書が後の可能性を考える。壁際中央から出土したことから、意図的に置かれたか、壁中央上部にある施設から落下したことのどちらかが考えられる。

⑩SI - 199 (第5図)

Ⅲ - 2期の竪穴建物である。ロクロ土師器皿5が西壁際中央の下層から斜めに傾いた正位で出土した。

「饗司」の墨書が体部外面に正位でみられ、口縁・体部の一部が弧状に欠損している。欠損部は打ち欠きとみられる。土器の様相と出土位置から、意図的に置かれたか、壁中央上部にある施設から落下したことのどちらかの可能性が、他所から廃棄された可能性よりも高いと思われる。カマド内外からも遺存のよい土器が出土している。まずロクロ土師器杯1がカマド内左袖寄りの下層から正位で出土し、須恵器杯2・3、ロクロ土師器皿4がカマド右袖と北東隅間から出土した。2は主要部分が下層から正位で出土し、3は上層、4は中層から出土した。4は口縁・体部に欠損があり、形状から打ち欠きとみられる。1・2はカマド廃棄の祭祀に関わる遺物の可能性がある。3・4も同様であるかどうかは、堆積土が埋め戻されたといえる根拠に欠けるため断定しがたい。

⑪SI - 361 (第6図)

Ⅲ - 2期の竪穴建物である。ロクロ土師器杯1・須恵器杯5は口縁・体部に欠損部があるが、1は形状から打ち欠きとみられる。5はやや断定しがたいが、出土状況から打ち欠きされた可能性が考えられる。また1は被熱痕跡がみられる。1と5の主要部分は同一地点から出土している。出入り口部の柱穴からわずかに出入り口側の壁(前壁)寄りの位置で、出土層位は中層である。正位・倒位等の状況は不明である。5の小破片1点はカマド内から出土している。須恵器杯4は前壁際で右前隅寄りの下層から出土したが、これも正

位・倒位等の状況は不明である。4は割れていない完形の土器である。

⑫SI - 389 (第6図)

Ⅲ - 2期の竪穴建物である。遺存良好なロクロ土師器杯群がカマド内・周辺から集中して出土した。まず1は火床部上の下層から正位で出土した。2・3はカマド右袖前の下層から2枚重ねの正位で出土した。2が下、3が上である。5はその手前の下層から正位で出土した。6はカマド中央前方の床面から倒位で出土した。2・6は割れていない完形の土器である。1・3・5は接合してほぼ完形の土器である。1・3の破損部は打ち割りされたものとみられる。3の破損部が6に接して出土している。また1・3・5は油煙が付着しており、灯明器である。1は体部外面に横位で「饗」、倒位で「大」の墨書がある。また2は底部内面に「大」の線刻がある。以上の土器群についてはカマド廃棄の祭祀に関わるものと考えられる。カマドから遠くなるが、ロクロ土師器杯4は中央南西寄りの中層から正位で出土した。灯明器であり、カマド・竪穴建物廃棄の祭祀に関わることも考えられる。しかし出土層位がやや高く、堆積土に埋め戻された根拠がないため、断定はしがたい。

⑬SI - 416 (第6図)

Ⅲ - 2期の竪穴建物である。ロクロ土師器高台付皿5がカマド内前側から出土した。接合してほぼ完形の土器である。主要部分はやや左寄りの床面から倒位で出土し、破片1片は右寄りから出土した。主要部分はさらに一部が割れているが、意図されたものか判然としない。しかし良好な供膳形態の土器が倒位で出土したことから、1点ではあるが、カマド廃棄の祭祀に関わるものと考えられる。

⑭SI - 131 (第6図)

Ⅲ - 4期の竪穴建物である。本竪穴出土遺物として図示したロクロ土師器杯11点(1~11)、土師器甕2点(12・13)の多くがカマド・竪穴建物廃棄の祭祀に関わるものである。本竪穴の堆積土は全体にローム土の含有が多く、埋め戻されたものと思われる。カマド内では、右袖寄りの下層から、胴部中位以下を欠損した甕13が倒位で出土し、13の上から杯5が倒位で出土した。13の破断面は水平であり、5の出土状況からもその欠損部は意図的に除去されたものである。13・5の近くで右袖上部から杯10が出土したが、正位・倒位等の状況は不明である。カマド内左側からは、杯2・6・11が直線状に出土した。手前から奥に6・11・2

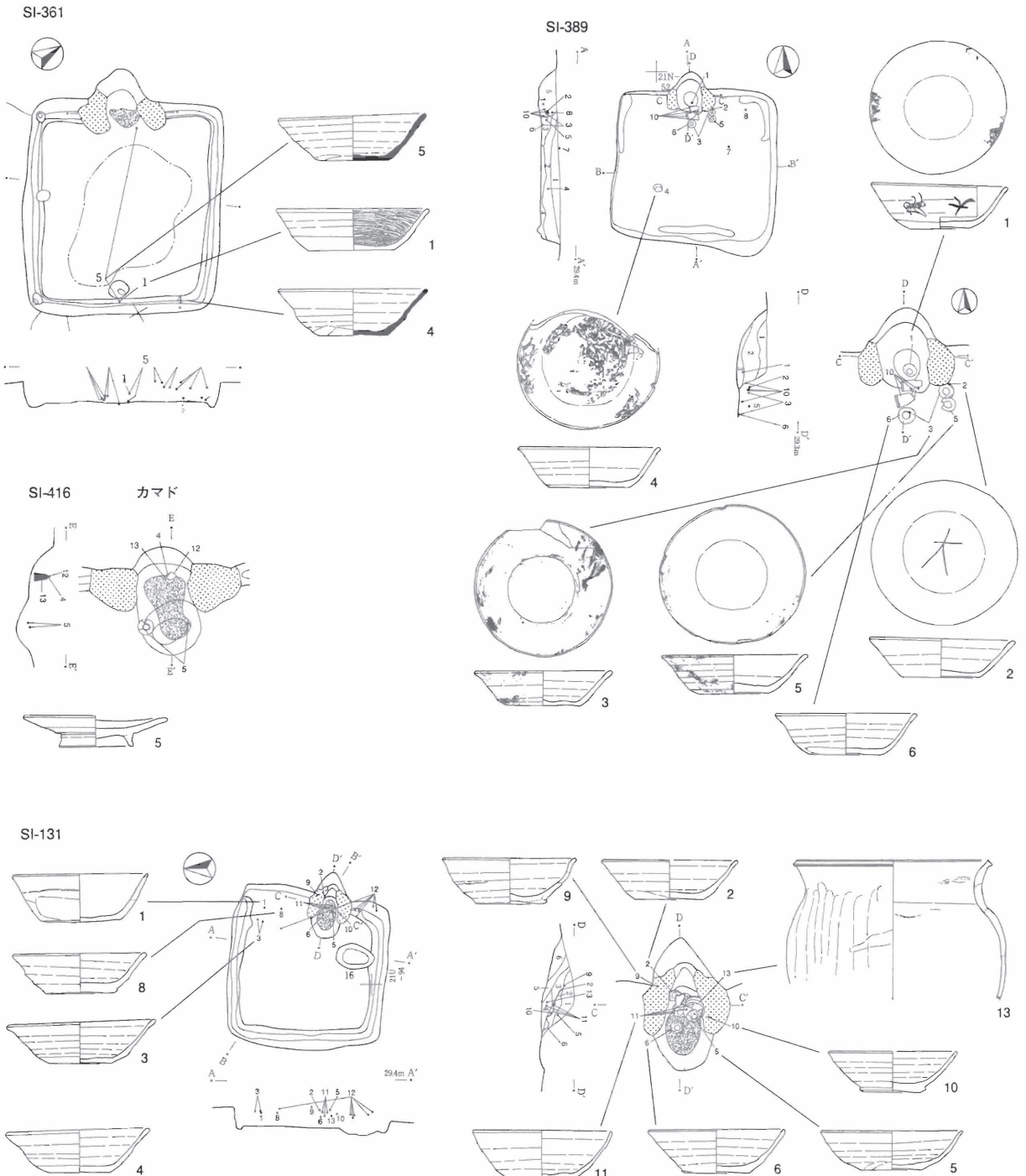
の順で、6・11は倒位、2は正位の出土である。また左袖上やや奥から杯9が出土したが、正位・倒位等の状況は不明である。以上の杯群のうち、5・6・11の欠損部は打ち欠きとみられる。2・9もその可能性はあるが断定しがたい。また5・6・9には被熱痕跡がみられる。

カマドの左方、左奥隅側では、遺存のよい杯1・3・8が中層から出土したが、いずれも正位・倒位等の状況は不明である。8は割れていない完形、1は接合してほぼ完形の土器である。3の欠損部は打ち欠きとみ

られる。1は灯明器であり、8にも被熱痕跡がみられる。以上の杯群はカマドからやや離れるが、カマド祭祀と連動する竪穴建物廃棄の祭祀に関わる土器群と思われる。なお杯4も遺存のよい土器であるが、出土位置が不明である。欠損部は打ち欠きとみられ、油煙の付着状況から打ち欠き後も灯明器として使われた土器である。位置不明であるが、土器の様相からカマド・竪穴建物廃棄の祭祀に関わる土器と考える。

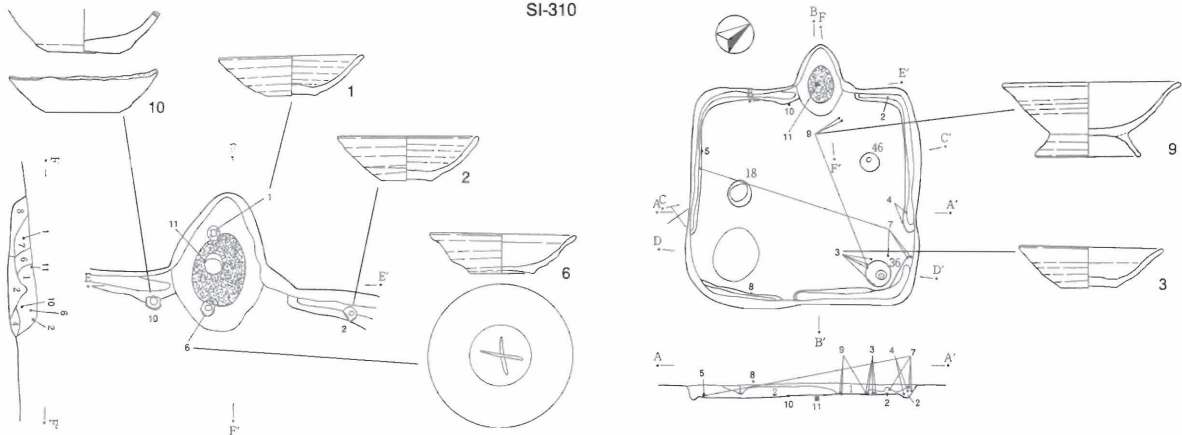
⑮SI-310 (第7図)

Ⅲ-4期の竪穴建物である。本竪穴のカマドには構



第6図 小屋ノ内遺跡竪穴建物遺物出土状況 (3)





第7図 小屋ノ内遺跡竪穴建物遺物出土状況(4)

築材の山砂がまったくみられないため、カマド廃棄の祭祀に際して除去されたものと思われる。土製支脚11が火床部中央やや後方から立った状態で出土した。使用時の位置をとどめる可能性があるが、構築材が遺存しないため、断定できるかやや懸念がある。また上部が欠損するが、竪穴が浅いため意図的なものか判然としない。カマド内・周辺から遺存のよい土器群が出土した。内訳は4点のロクロ土師器杯(1・2・6・10)と1点のロクロ土師器高台付杯(9)である。杯1は火床部の奥、支脚後方の下層から出土した。正位か倒位か不明である。杯2はカマド右側下層から正位で出土した。右袖が遺存するならば、その右外側の位置である。杯6はカマド火床部前側下層から正位で出土した。杯10はカマド左側下層から正位で出土した。左袖が遺存するならば、その外脇に接する位置か、左袖の位置であろう。1は割れていない完形品であり、2・6・10の欠損部は打ち欠きとみられる。高台付杯9は、主要部分がカマド右前方の床面から、一部が右前隅の床面から出土した。欠損部が打ち欠きされたものか断定しがたい。

その他の遺物では、ロクロ土師器杯3が右前隅側の床面から出土した。遺存はよいが、やや細かく割れている。9の一部破片は3の近くから出土した。また右前隅には小穴もある。これらはカマド内外の土器群と関わる可能性も考えられるが、小穴は他にもあり、断定するにはやや弱い。

以上の土器群のうち、中央の支脚と周囲の4点の杯はカマド廃棄の祭祀に関わるものとみられる。杯群については四方拝的な様相もうかがえる。また9もカマド廃棄の祭祀に加わる可能性が考えられる。

## (2) 事例の検討

以上、小屋ノ内遺跡の竪穴建物廃棄時における祭祀性をもつ遺物出土状況について、良好な事例をみてきた。この遺物出土状況のあり方について、遺物の出土位置から下記の分類を行って検討してみたい。

A カマド周辺 B 出入口部周辺

C 壁際 C1 隅部 (a左奥隅部、b右奥隅部、c左前隅部、d右前隅)

C2 壁中央 (a左壁、b右壁)

D 竪穴内部

なお遺物の出土位置によっては、以上の分類のどれにあてはまるのか難しい場合がある。たとえば、カマドの外側から出土したものについて、カマド周辺であるのか、隅部であるのか、判断に迷う場合がある。上記の分類でいえば、C1 aとC1 bはAとの区別が難しい場合がある。また壁際の出土遺物でも、隅に近いのか、中央に近いのかも微妙な場合がある。さらに壁寄りであるか竪穴内側寄りであるかも同様な問題がある。なお出入口部については、壁際でもあるが、出入りする点で他の壁際と異なり、また特に重視された場所であるため、カマドとともに別分類とした。分類の境界は不明瞭であるが、遺物の出土位置という視点から、上述した小屋ノ内遺跡竪穴建物出土遺物をみていきたい。なおC2の壁際中央には、前壁・後壁という分類も考えられるが、前者は通常Bに含まれ、後者はAに含まれる場合が多いため、特に分類項目として設定しない。

取り上げた小屋ノ内遺跡竪穴建物の遺物出土のあり方を上記の分類にあてはめると下記ようになる。

①SI-356…B ②SI-179…A ③SI-331…A ④SI-192…C1 b・C1 d・C2 a ⑤SI-333A…A・C1 a ⑥SI-384…A・B ⑦SI-104…A ⑧SI-075…A・C1 a・C1 b ⑨SI-117…C2 b ⑩SI

- 199…A・C2 a ⑪SI-361…A・B・C1 b ⑫  
SI-389…A・D ⑬SI-416…A ⑭SI-131…A・  
C1 a ⑮SI-310…A (C1 bを含む)・C1 d

遺物の出土位置は、Aのカマド周辺が最も多く、15棟のうち12棟を数える。祭祀性をもつと考えられる遺物の出土位置はカマド周辺に集中しているといえる。カマドからやや離れるものでも、SI-310のC1 bはカマド内・周辺の他の遺物と一体をなすものであり、SI-075のC1 a・C1 bもAとともに広がりをもつものである。またSI-333AやSI-131のC1 aもカマドと不可分の可能性がある。

カマドから遠い位置のものは少ないが、出入口部のBが3棟あって、やや目立っている。その他は、右前隅(C1 d)が2例、左壁際中央(C2 a)が2例、右壁際中央が(C2 b)が1例、竪穴内側が1例である。しかしこれらの事例については、実際はもっと多いと考える。近年、カマド祭祀が注目されるとともに、カマド周辺の良好な遺物出土状況が調査・報告されるようになってきたが、カマド以外はカマドに対するほどの注意が向けられていないと思われる。カマドほどは多くないであろうが、実際はより多いと考える。

ところで、筆者は前稿において打ち欠き土器を検討した際、居住者が竪穴建物の廃棄にあたって、意図的に土器をその場所に置いてきたと推測したが、墨書土器の出土状況を検討した井上尚明氏は、筆者が指摘する以前に同様の視点で論述している[井上2004]。また井上氏は壁際については物置的な空間が存在し、そこには通常土器等が保管されていたことも指摘している。確かに引っ越しにあたって、物置的な場所から不要品を持ち出さなかったことはあり得る。両者の区別は難しいが、出土遺物に祭祀性が認められるならば、日常的に保管されたものの遺棄であっても、意図的に置かれたものとの差は少ないと考える。さらに桐生直彦氏は、壁際の出土遺物の一部について、竪穴上部の施設や、竪穴外屋内空間から転落したものがあつたことを想定している[桐生2005]<sup>6)</sup>。

遺物出土状況に関する上記三者のうち、上方からの落下という視点から小屋ノ内遺跡出土遺物をみると、SI-199の5にその可能性が見いだせる。5は左壁際中央の出土であるが、床面よりもやや高い位置であり、竪穴内側に斜めに傾いて出土した。「饗司」という墨書もち、打ち欠きされた皿であるので、この土器単体で既に日常的なものではない。その場所に廃棄された、または祭祀的に遺棄された可能性の他、左壁中央

の上方にある神棚的な施設から転落した可能性も十分にある。

### (3) カマド廃棄の祭祀

前項までにみたように、竪穴建物廃棄時における祭祀性をもつ遺物出土状況の場としては、カマド周辺が圧倒的に多い。そこで次に小屋ノ内遺跡におけるカマド内外の遺物出土状況について、先に事例としてあげた竪穴建物に加えて、良好な出土状況を示すすべての竪穴建物を対象に検討したい。

そのような視点から作成したものが、第1表である。表の作成にあたって第一に留意したことは、出土遺物の平面的な位置であり、まずカマドに向かって、左外側、中央、右外側と大きく3区分した。なお三者ともカマドからやや離れた前方部分まで含めている。またカマド中央については、左側、中央、右側と三つに小区分した。左側とも右側ともいえないものについては中央に含めている。これらの境界については、前項の位置関係と同様に、不明瞭な点がある。たとえば左前方に区分したものと、中央左側に区分したものの間に、差が微妙なものがある。他の区分についても同様であり、境界は厳密なものでない。また単に中央と認識したもののなかに、有機質の祭祀具が存在した場合、本来は左右・中央の区分でみるべきものがあるかもしれない<sup>7)</sup>。この点は考古学的な限界があつて、把握することが難しい。しかし曖昧な点を含むものの、上記のような区分をしたのは、カマドに向かって、右側・左側等の違いに何らかの意味があつたと考えたことによる。

次に留意したことは、土器等を伏せているのか(倒位・逆位。本稿では倒位と記述)、底部を下にしているか(正位)、横倒れか、破損しているのか等である。これらも出土位置同様、その違いに何らかの意味の違いがあつたと考える。

なおカマド内・周辺の遺物については、壁上方や棚状施設<sup>8)</sup>からの落下も考えられる。特に杯等の小型の遺物で斜めに出土したものは注意が必要である。第1表の遺物のなかにも斜めの状態で出土したものが含まれている。しかし全体にそこまでの観察ができていないものも多く、カマド廃棄の祭祀に関わる遺物と自然落下の遺物を区別することはかなり難しい。さらに壁上方等に遺棄された遺物がカマド廃棄の祭祀に関わることも考えられるので、事はそう単純でない。

第1表で取り上げた事例のなかには単なる廃棄や遺

第1表 小屋ノ内遺跡奈良・平安時代竪穴建物におけるカマド内外の遺物出土状況

遺構	位置	中央			右外・右前方
		左外・左前方	左	中央・その他・無区分	
SI-072				須恵器甕1点 横位	土師器杯1点 正位
SI-075	須恵器香炉蓋1点 斜倒位	須恵器杯1点 正位 土師器甕1点 倒位		須恵器杯2点重ね 正位	須恵器甕1点(底部穿孔) 横位 土師器杯1点 正位 須恵器杯1点 正位
SI-080					須恵器高台杯1点 正位
SI-085		土師器杯1点 倒位			
SI-098	(左袖前) 土師器杯1点 正位				
SI-104					土師器甕3点 倒位 土師器甕1点 横位 土師器甕1点 破損 土師器杯1点 正位 土製支脚2点
SI-108					土師器杯1点 正位
SI-113			土師器杯1点 正位		土師器杯1点 倒位
SI-118		(やや左) 須恵器杯1点 倒位	土製支脚1点 倒位か		
SI-120					須恵器杯1点 正位
SI-131		土師器杯2点 倒位 土師器杯1点 正位		土師器甕1点 倒位 土師器杯1点 倒位	
SI-132			土師器甕2点 倒位 土師器甕2点 破損 須恵器甕1点 斜正位		
SI-133					(左側) 須恵器杯1点 倒位 (右側) 須恵器杯1点 正位 (右袖前方) 須恵器甕1点 破損
SI-155		土師器杯3点重ね 正位	土師器甕1点(支脚上) 倒位(支脚転用か)		
SI-179		土師器甕1点 横位			須恵器蓋2点 倒位 須恵器高台付盤1点 倒位
SI-194			須恵器蓋1点 正位(支脚位置) 土師器甕1点 破損(煙道)		
SI-196	須恵器杯1点 倒位		(外中央) 土師器杯1点 正位		土師器甕1点 正位
SI-199		土師器杯1点 正位			須恵器杯1点 正位
SI-209	(左袖前) 須恵器高台付盤1点 倒位				
SI-310	土師器杯1点 正位		(奥) 土師器杯1点 不明 (中央) 土製支脚 (前) 土師器杯1点 正位		土師器杯1点 正位
SI-326旧カマド			土製支脚 倒位 土師器高台付杯 正位(支脚転用) 土師器杯 正位(支脚転用)		
SI-330			(支脚位置) 手捏土器1点 正位		
SI-331		(やや左) 土師器杯1点 正位 (底部穿孔)			
SI-333A			(前寄り) 土師器杯1点 正位		
SI-344					須恵器杯1点 不明
SI-350			須恵器杯1点 斜倒位 須恵器甕1点 破損, 斜倒位? 土製支脚1点		
SI-353			土師器杯2点 倒位(支脚転用)		
SI-371		須恵器杯1点 不明			
SI-377			(前) 須恵器杯1点 不明		
SI-378			土製支脚		土製支脚1点 土師器甕1点 不明(底部穿孔)
SI-380	須恵器杯1点 不明				
SI-384	(左袖前方) 土師器杯1点 正位		土師器甕1点 横位 土師器杯1点 斜正位(甕の中)		
SI-386			須恵器杯1点 不明		
SI-387			土師器甕1点 倒位 土師器甕1点 破損		
SI-388			土師器甕1点 正位(底部除去) + 須恵器甕破片(土師器甕口縁部上)		
SI-399			(奥) 土師器杯1点 正位 (前方) 土師器杯1点 倒位		土師器杯2点 正位
SI-400	須恵器杯1点 不明				須恵器甕1点 正位
SI-402	須恵器甕1点 倒位				
SI-409	須恵器杯1点 正位				
SI-415			須恵器甕1点 倒位 土師器杯2点 倒位 セットで支脚転用		
SI-416		(左) 土師器皿1点 倒位			
SI-417	須恵器杯1点 不明		須恵器甕1点 正位(底部穿孔)		

棄を含む可能性が若干考えられる。しかしそのような場合があったとしても、数は少ないと考えている。以上のように、若干の問題点はあるが、第1表を検討のベースとしたい。

全体を概観してみると、中央その他が多いのは、左右を区分できないものが含まれているため、当然といえよう。中央を除いてみると、右外側・右前方の出土例が多い。しかし、右外側等と中央右側を合わせた出土遺物の数量と、左外側等・中央左側を合わせた数量の比較では、前者が33個体、後者が26個体である。極端な差ではなく、比較的左右のバランスがとれている。

次に正位・倒位等の状況を見るが、甕は破損しているものが多く、杯と同列にみることは問題がある。たとえば正位の場合でも、胴部下位や底部を欠損しているもの及び口縁部に他の土器で蓋をしたようなものは、正位の杯と同様の意味があるか疑問である。また供膳形態でも、蓋の場合、天井部を下にしたものが伏せた杯と同様の意味をもつか、これも不安がある。そのため有台を含む杯碗・皿・盤・手捏に絞ってみたい。なお杯碗等のなかには、支脚に転用されたものが存在する。そのなかには単に遺棄されただけの場合もあると思われるが、打ち欠き・打ち割り等が施された場合は、最終的にカマド廃棄の祭祀に使用された可能性がある。祭祀でない遺棄と祭祀的な遺棄の区別は難しい場合が多いため、第1表では支脚転用の杯等も掲載している。

杯碗等の出土状況を概観すると、正位のもものが35個体に対し、倒位のもものが16個体である。正位がかなり多いが、倒位のもものも少なからずみられる。カマド位置との関係を見ると、中央から右側では正位の数量が勝っているのに対し、左側では正位と倒位の数量がほぼ拮抗している。筆者は前稿で、カマドに対して右側に正位の土器、左側に倒位の土器の設置が典型例の一つと考えたが、大まかな傾向性としては認めることができるかもしれない。小屋ノ内遺跡の事例を個々にみると、SI-196が適合する事例である。またSI-133はカマド右側からの出土であるが、右側でも左寄りの杯は倒位、右寄りの杯は正位である。

しかしSI-113は逆の事例であり、SI-131も逆の事例を含んで混在している。したがって作法の基本となるあり方が存在したとしても、厳密なものではないといえよう。むしろ現状では正位と倒位が入り混じっていることと、正位と倒位はセットとなる場合が多いことを確認するに留める方が無難であろう。この点は他遺

跡の検討によって、明らかになると考える。

さてこれまでカマド廃棄の祭祀においては、伏せた杯の意義を指摘されることが多かった〔寺沢1992・阿久津1994等〕。しかしここでみたように、小屋ノ内遺跡におけるカマド周辺の遺物出土状況においては、倒位の杯ばかりでなく、正位の杯等がむしろそれ以上に多いことが明らかとなった。船尾白幡遺跡や鳴神山遺跡群においても正位の杯等がみられ、今回他遺跡については詳細に検討していないが、かなり存在するものと思われる。カマド廃棄の祭祀については、正位の杯等の検討が必須であると考えられる。

甕・甌は破損している場合が多く、単なる廃棄との区別が難しい場合がある。またSI-155のように支脚に小型の甕をかぶせたものも、支脚及び支脚転用の土器を単に廃棄したのか、カマド廃棄の祭祀であるのか、判断が難しい。しかし胴部下位から底部を欠き、破断面が水平であるものや、比較的整った状態で底部中心を欠くものは、意図的な除去や底部穿孔の可能性が高く、カマド廃棄の祭祀に関わると考えられる。甕類が出土した祭祀のなかで最も明瞭なものは、甕のなかに杯をもつSI-384である。なお詳細な状況は先述した通りである。

甕・甌の出土状況を見ると、火床部や煙道部から出土したものがやや多い。そのなかには煙道部を塞ぐ意図をもつと思われるものもある（SI-194・SI-388）。SI-388では、除去されたと思われる正位の土師器甕の口縁部のなかに、須恵器甕の胴部破片がみられた。これも甕に蓋をした、すなわち塞ぐ意図のあった事例と思われる。

カマドの左右周辺の状況を比較すると、右外・右前方での出土がやや多く、左側は少ない。しかしこの点については傾向性といえるほどのものか断定しがたく、今後の検討課題としたい。

小屋ノ内遺跡のカマドでは、土製支脚が出土しない場合が最も多い。土製支脚が出土した場合の状況を見ると、火床部奥側に正立したものが何点かみられる。これらの多くは単なる遺棄以上のことをいえるかどうか不明瞭である。一方、例は少ないがカマド外から出土したものもある（SI-104・SI-378）。SI-104・SI-378両者の土製支脚は、カマド右袖外側から出土している点で共通性がある。なおSI-104の詳細な状況は先述したが、確実にカマド廃棄の祭祀に関わるものである。それに比べ、SI-378の場合は火床部からも土製支脚が出土しており、予備の支脚との見方も生じる余地があ

る。しかし近接して出土した土師器甕（6）の底部が穿孔されているとみられることから、やはりカマド廃棄の祭祀に関わる可能性が高いと考える。

またカマド内から出土していても、上部と基部を逆さにした倒位と思われる支脚がある（SI-118・SI-326）。ただしこれらの出土状況はやや不明瞭である。特にSI-326の場合は、基底部と思われる面の上部から被熱した正位の杯類2点が出土しており、それらとともに倒位にした支脚がこだわらずに実用にされたことも考えられる。一方、この状況は実用でなく、カマド廃棄の祭祀時に、支脚を倒位に据え直し、その上部に支脚転用の杯類を納め直したことも考えられる。SI-326の事例は旧カマドのものであり、後者の可能性が高いと考える。事例が少ないため断定しがたいが、本来的な位置から出土していても、倒位の場合はカマド廃棄の祭祀に関わる可能性が高いと考える<sup>9)</sup>。

#### 4 カマド・竪穴建物廃棄の祭祀の検討

奈良・平安時代におけるカマド廃棄の祭祀については、これまでに竈神の信仰と結びついて、竈神を饗応し、封印するという考えがいわれてきた<sup>10)</sup>。これは、竈神や三戸の虫が天の上帝に家人の悪行を報告に行くことを阻止するため、竈神等をカマド内に閉じこめるというものである。筆者もその見解に則って、前稿において若干の考えを述べたことがある。

なおカマド祭祀については、そのまま竈神の祭祀と同じとしてよいか、慎重であるべきという意見も提示されている〔寺沢1992〕。カマドが導入され、定着をみた5世紀～6世紀代においては、カマド祭祀が即竈神の祭祀であるといえるかどうかは難しい。また5世紀後半から8・9世紀代までには300年前後の時が経過しており、その間カマド祭祀も、中国大陸や韓半島からの思想の伝来及び在地での信仰の発展や変質により、すべてが首尾一貫したものではないであろう。しかし奈良・平安時代にあっては、芝山町庄作遺跡の墨書土器にみられるように、文字史料として「竈神」が存在する〔松田他1990、平川2000〕。本稿で対象とする奈良・平安時代においては、カマド祭祀は竈神に関わるものであったとみられ、ここでは時代と地域を限定したうえで、カマド祭祀は竈神の祭祀と不可分のものであるという前提で論を進める。

ところで上記の竈神を閉じこめるという考えに対して、カマドを破壊することによって、竈神を追い出し、新宅に移動させるという逆の解釈がある〔堤1995・富

永2005等〕。近年、カマド祭祀を取り上げた荒井秀規氏は、前者を「竈神封印説」、後者を「竈神移遷説」として整理・考察した〔荒井2006〕。荒井氏は従来この両者が互いの説に関心を払っていないことに注意を促し、自らは文献史料の検討を加味して、後説を採用した。確かに以前の筆者の言及も、荒井氏の指摘の通りであった。そこで本項ではこの両説について考えてみたい。

従来「竈神封印説」の拠り所とされてきたのは、中国東晋代の書籍『抱朴子』等の記述である。『抱朴子』の記述によれば、竈神は家族の罪過を天帝に報告し、天帝はその罪過の大小に応じて、人の寿命を縮めるといふ〔水野1982・荒井2006〕。この竈神の特質とカマド周辺の遺物出土状況を結びつけたものが、「竈神封印説」であり、家人の罪状を天帝に報告させないため、竈神をカマドに封じ込めるといふものである。

水野正好氏の論考は、この竈神及び『抱朴子』を大きく取り上げたものである。しかし水野氏は『抱朴子』の他にも、古代中国の書籍を取り上げている。その一つである南宋の『宋詩鈔』の記述からは、「竈神には酒食を進め、…醉酒飽食の末、天門に帰らせようとする様子が読みとれる」といふ。そして「（竈神が）上気嫌で天帝に報ずるならば罪状は消え福祥がもたらされると考えている」と理解されている〔水野1982〕。

この『宋詩鈔』の考えによるならば、古代中国の思想は「竈神封印説」の絶対的な根拠にはならないと言わざるを得ない。

次にカマド周辺の遺物出土状況について、両説との関係を考えてみたい。まず正位の杯等の土器であるが、これは竈神を饗応するために食物を盛った土器、またはその饗応を象徴する行為といえよう。また比較的多くみられる灯明器についても、夜を徹して大いにもてなすことの表現と考えられる。これらは、「竈神移遷説」の場合、天帝により良い報告をさせ、福德を得るための饗応となり、「竈神封印説」では饗応によって引き留め、天帝のもとに赴かせない行為となる。なお荒井氏の「竈神移遷説」では、竈神は天に戻らず、新居に移るとしているが、福德を得るため、いったん天帝に報告させ、その後新居に移るとしてもよいのではないだろうか。

倒位の土器について、荒井氏はカマドの解体<sup>11)</sup>から続く「一連の祭祀」としており〔荒井2006〕、カマドを廃棄する行為の意思表示と理解できる。竈神が二度と戻れないように、カマドを破壊し、その象徴とし

て倒位の杯を設置するという理解が、「竈神移遷説」と倒位の杯の関係である。一方、「竈神封印説」では、カマドの破壊によって竈神を封じ込め、その象徴として倒位の土器を設置するか、または竈神そのものを倒位の土器に封印する、という見方が考えられる。

カマド火床部や煙道部から出土した甕・甔等の場合も、両様考えられる。甕・甔は「竈神封印説」では、文字通りに竈神が煙道部から出られないように閉塞したものと考えられる。一方「竈神移遷説」では、倒位の杯と同様に、カマドを廃棄する行為の象徴といえよう。

ここで、カマド周辺遺物の祭祀的な出土状況について、「竈神移遷説」と「竈神封印説」のどちらがふさわしいのかの結論を出す前にカマドから離れた場所での遺物出土状況の意義を考えてみたい。

カマド内と隅部の出土遺物が接合する場合や、カマド内と出入口部の出土遺物が接合する事例等から、カマド内出土遺物と、竈穴内各所から出土する祭祀的な出土遺物には、関連性をもつ場合があることがうかがえる。

かつて筆者は、印西市鳴神山遺跡における竈穴建物出入口部から出土した正位・倒位の杯について、『春日権現験記絵』の例を引いて、鬼の侵入を阻む状況と理解した〔糸川2005〕。「鬼」と出入口部の関係については、先述した船尾白幡遺跡SIⅡ78号竈穴建物の状況によって補強されたと考える。小屋ノ内遺跡においても、先述したSI-356において正位の杯が出土している。また「鬼」をもつ土器については出入口部だけでなく、柱穴内やカマドそのものから出土している場合がある<sup>12)</sup>。

正位の土器・倒位の土器については、出入口部だけでなく、隅部や壁際、さらに竈穴内部にも認められる。その性格について考えると、正位の土器の場合、やはり鬼神等への饗応と思われる。出入口部の場合、饗応することによって引き留めて、それ以上の侵入を阻止する状況と理解できる。壁際の場合も、出入口部に準じる状況であり、鬼神の侵入を壁体で阻む意図があると思われる。それに対し倒位の土器はどのように解釈できるのであろうか。一つは竈穴建物廃棄の意思表示と考えられる。二度と使用することのない竈穴建物についての廃棄の象徴として、土器を伏せ置いたという見方である。

しかし個々の遺物の出土状況を見ていくと、より具体的な意味があるように思われる。その具体的な意味

とは、やはり「封印」ではないだろうか。すなわち悪鬼・精霊等の類に対し、出入口・壁際で饗応し、その場で封じ込めると理解するのである。そして結界を破って侵入した悪鬼や古くから住み着いている精霊等に対しては、竈穴内で饗応し、封印するのである。

このように考えてくると、竈穴内各所と連動するカマドについても、倒位の土器は「封印」と理解できそうである。ただし、その場合「封印」されるべきものが竈神であるかどうかは検討を要する。国家的祭祀での竈神のあり方や内外の文献史料、また出土文字資料等から、竈神のみは別格である可能性もある。すなわち、より強力な福德を得るために、竈神を天帝に赴かせ、新宅に迎えるということもあり得たと思われるのである。一方で災いしかもたらさない悪鬼や、新宅に連れて行くことがふさわしくない精霊等は封印されたと考えられる。

しかし竈神のみを別格とする根拠は、遺物出土状況の検討から導いた結論ではない。遺物出土状況を素直に解釈すれば、「封印」がより妥当と考える。ただし「封印」説を採った場合、文献史学や民俗学の「移遷」とは整合しないため、克服すべき課題は小さくない。また考古学的にも、「移遷」と関わるカマド解体については、十分な検討ができなかった。筆者の「封印」も遺物出土状況という一面からみたものであり、総合的に強力な根拠に拠ったものではない。したがってこの件に関しては、依然今後の検討課題としたい。

## 5 おわりに

カマド廃棄時の祭祀において、竈神の「移遷」と「封印」を検討してきたが、遺物出土状況からみた場合「封印」がより妥当であると考えた。ただしこのような古代人の精神生活を考古学的に実証することは非常に難しく、相反する解釈がなされることも決して少なくない<sup>13)</sup>。この件に関しては残された課題が多いため、ここでその問題点を取り上げる。

遺物出土状況からは、「移遷説」、「封印説」ともにいえることだが、より基礎的な観察が必要である。カマド周りに関してだけみても、倒位の土器だけでなく、正位の土器にも目を向ける必要がある。遺物の内容からみると、これまで墨書土器に偏重してきたきらいがあるが、灯明器や打ち欠き・打ち割り・穿孔された土器も検討の対象としなければならない。また出土状況だけで祭祀性がある遺存のよい土器や金属製品・紡錘車等にも注意する必要がある。なおそれらをセットで

みていく視点も重要である。

またカマド周辺だけでなく、出入口部・壁際等、カマドから離れた場所の出土状況にも注意しなければならない。出土層位・接合関係の把握も重要である。

問題解決に向かう新出の文字資料の出土が期待されるが、既出土のものでも、重要なものが存在するかもしれない。総合的な再検討も必要であろう。

「移遷説」の立場からは、カマド内外の遺物出土状況に関するより明解な説明が必要と考える。一方の「封印説」は先述したとおり、文献史学・民俗学との整合性が大きな問題である。

カマド祭祀については論考が非常に多く、また直接的なテーマでなくても、側面からの言及が多いと考えられる。そのため重要な文献を見落としている可能性があり、また本稿で取り上げた文献に対しても曲解・誤解もあるかと思われる。ここで先学諸氏に対する非礼をお詫びするとともに、多くの方々から御教示・御批判をいただくことを期待したい。

最後に、本稿の記述に際しては、小林清隆氏から様々なご教示をいただくとともに、文献の紹介等でもお世話いただいた。また小林信一氏からも一部の遺物についてご教示をいただいた。ここに記して両氏に感謝申し上げます。

## 註

- 1 近年の論考のなかでは、富永樹氏がこの点を指摘している。〔富永2005〕。
- 2 この点については、今泉潔氏が指摘している〔今泉1989〕。
- 3 山梨県考古学協会第10回秋季大会の討論での桐生直彦氏の発言に拠っている〔山梨県考古学協会1995〕。
- 4 千葉県山武郡芝山町庄作遺跡第46号竪穴建物から「…秋人歳神奉進 上総…」と判読された墨書文字をもつクロロ土師器杯が出土している〔松田他1990〕。この資料から、歳時的な神の存在を知ることができる。ただしこの長文墨書自体は1回性の願文であろう。
- 5 壁の呼称については、方位で表す他、北からかなり傾いている場合もあるので、ここでは左右前後（奥）を併用する。原則としてカマド側を後壁または奥壁、カマドに対向する出入口側を前壁、カマドに向かって右側を右壁、左側を左壁とする。
- 6 井上氏は、上方からの転落・落下という点についても、言及している〔井上2004〕
- 7 高橋照彦氏は、平安時代において「葉椀」・「葉皿」と呼ばれたものが、柏の葉などで作られた祭祀的な容器であることを指摘している〔高橋1997〕。このような祭祀具が、平安時代の東国の集落において存在するかどうかは今後の検討課題であるが、その可能性を考慮する必要があると考える。
- 8 小屋ノ内遺跡においては柵状施設の検出は数例である。本来あまり多くないのかもしれないが、上部の遺存がよかつた

ならば、検出例が増えたことが考えられる。

- 9 倒位の支脚については、田形孝一氏がカマド祭祀の視点から取り上げている〔田形1996〕。
- 10 荒井秀規氏によって整理されるまでは〔荒井2006〕、広く浸透している見解の一つである。代表的なものとして、栗田則久氏による1988年時点での考察を指摘する〔栗田1988〕。
- 11 中沢悟氏や堤隆氏の論考によれば、カマド構築に石材を多用する奈良・平安時代の上野や甲斐においては、カマドの解体は一般的な行為であったとみられる〔中沢1986、堤1991・1995〕。房総においても、古墳時代のカマド・竪穴建物を考察した小林清隆氏や今泉潔氏は、完全な形のカマドがほとんどみられないことから、竪穴建物廃棄時にカマドの破壊が通常のであったと考察している〔小林1989、今泉1989〕。たしかに竪穴が遺存するにもかかわらず、構築材がまったくみられないカマドがあることから、房総の場合でも解体されたカマドは確実に存在する。しかし房総においては、カマド構築材が砂質粘土や山砂といわれる粘土質・砂質の土であり、前天井を落とした程度の破壊であった場合、自然落下との区別が付くのか、やや不安がある。カマドの解体が房総において、どれだけ一般的であるか、実態としてはその可能性が高いのかもしれないが、筆者には確信がもてない。そのため本稿においては、房総におけるカマド廃棄の祭祀行為時に、ほとんどのカマドが解体されているかどうかについては保留したい。
- 12 「鬼」の線刻をもつ土師器杯が、鳴神山遺跡 I 044竪穴建物の左奥側の柱穴から正位で出土した〔鳴田・田形1999〕。また旧大栄町（現成田市）村田居山遺跡 S19竪穴建物カマド内からは、「鬼守総□磨」と書かれた墨書をもつ土師器杯が倒位で出土した〔黒沢1997〕。
- 13 以前、堤隆氏はカマドの解体の意味を竈神の送りと述べたが〔堤1991・1995〕、近年この件について再論している。その中で堤氏はカマドの廃棄状況について、「封鎖」（封印）も「送り」（移遷）も双方あり得たことを述べ、新しい見解を示した〔堤2007〕。二者ともありえたかどうかはさておき、考古学的状況の解釈の難しさを示していると思われる。

## 引用文献・参考文献

- 阿久津久 1994 「カマドにみる祭祀の一形態」『日立史苑』第7号 日立市史編さん委員会
- 荒井秀規 2006 「竈神と墨書土器」『古代の信仰と社会』国土館大学考古学会
- 荒木志伸 1999 「墨書土器に見える諸痕跡について」『お茶の水史学』第43号
- 糸川道行 2004 「第8章第2節4. 土器の打ち欠き・穿孔及び破壊について」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVI—印西市船尾白幡遺跡—』（財）千葉県文化財センター
- 糸川道行 2005 「古代土器の打ち欠き・穿孔—千葉県印西市鳴神山遺跡群出土土器の検討—」『研究紀要24』（財）千葉県文化財センター
- 糸川道行他 2006 『四街道市小屋ノ内遺跡（2）』（財）千葉県教育振興財団
- 糸川道行他 2007 『四街道市小屋ノ内遺跡（3）』（財）千葉県教育振興財団
- 井上尚明 2004 「墨書土器の再検討—出土状況からみた墨書土器の属性—」『幸魂（さきみたま）—増田逸明氏追悼論

- 文集— 北武蔵古代文化研究会
- 今泉潔 1989 「堅穴住居の解体と引越し」『史館』第21号
- 小笠原永隆 2004 『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書3—印西市松崎Ⅵ遺跡・松崎Ⅶ遺跡—』  
(財)千葉県文化財センター
- 香取正彦他 2005 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ—印西市船尾白幡遺跡Ⅱ—』 (財)千葉県文化財センター
- 岸本雅人 2006 『船橋・印西線埋蔵文化財調査報告書5 —八千代市島田込ノ内遺跡(2)・間見穴遺跡(3)・道地遺跡(2)—』 (財)千葉県教育振興財団
- 桐生直彦 2005 『竈をもつ堅穴建物跡の研究』六一書房
- 栗田則久 1988 「出土状況からみた墨書土器の機能」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 佐原地区(1)』  
(財)千葉県文化財センター
- 黒沢哲郎 1997 『村田居山遺跡』(財)香取郡市文化財センター
- 田形孝一 1996 「集落から村落へ(1)」『研究連絡誌』第47号  
(財)千葉県文化財センター
- 高橋照彦 1997 「「瓷器」「茶椀」「葉椀」「様器」考 文献にみえる平安時代の食器名をめぐって」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- 堤隆 1991 「住居廃絶時における竈解体をめぐる —竈祭祀の普遍性の一側面—」『東海史学』第25号  
東海大学史学会
- 堤隆 1995 「竈の廃棄プロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』第7号
- 堤隆 2007 「堅穴建物廃絶時のカマド解体とその意味」『月刊考古学ジャーナル』No.559 (2007年6月号) ニューサイエンス社
- 寺沢知子 1992 「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」『同志社大学考古学シリーズ V 考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 富永樹之 2005 「神奈川県における奈良・平安時代の祭祀遺構と遺物」『論叢古代相模』相模の古代を考える会
- 中沢悟 1986 「竈の廃棄について」『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡』  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 鳴田浩司・田形孝一 1999 『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
- 平川南 2000 「“古代人の死”と墨書土器」『墨書土器の研究』  
吉川弘文館
- 松田政基他 1990 『小原遺跡群調査報告書』山武考古学研究所
- 水野正好 1982 「竈形 日本古代の竈神の周辺」『古代研究』第24号 元興寺文化財研究所
- 山梨県考古学協会 1995 特集山梨県考古学協会第10回秋季大会論考篇『発掘が語る古代堅穴住居の様相』『山梨県考古学協会誌』第7号